

第23回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 平成29年7月11日（火）13:30～14:30

2. 場 所 中央合同庁舎第8号館5階共用C会議室

3. 出席者 内閣府原子力委員会
岡委員長、阿部委員、中西委員
内閣府原子力政策担当室
進藤審議官、室谷参事官

4. 議 題

- (1) I F N E C 運営グループ会合（S G）及びアドホック需給国会合（N S C C E G）の結果概要について
- (2) その他

5. 配布資料

- (1) 国際原子力エネルギー協力フレームワーク（I F N E C）運営グループ会合（S G）及びアドホック需給国関係会合（N S C C E G）の結果概要について

6. 審議事項

（岡委員長）それでは、時間になりましたので、ただいまから第23回原子力委員会を開催いたします。

本日の議題は、一つ目は、I F N E C 運営グループ会合及びアドホック需給国会合の結果概要について、二つ目がその他です。

それでは事務局から説明をお願いします。

（室谷参事官）ありがとうございます。それでは1件目の議題でございます。

6月26日から29日に開催されましたI F N E C 運営グループ会合及びアドホック需給国会合の結果について御報告をいたしたいというふうに思っております。

本日は内閣府の進藤大臣官房審議官から御説明をいただき、その後、質疑をいただく予定

でございます。それではどうぞよろしく申し上げます。

(進藤審議会) 座って説明させていただきます。

原子力委員会資料第1号、国際原子力エネルギー協力フレームワーク運営グループ会合及びアドホック需給国会合の結果概要についてという資料をごらんいただければと思います。

この6月26日から29日まで、IFNECという団体の運営グループ会合ほか関連会合がパリOECD本部において開催されました。

1ページ目の1ポツに会議日程が書いてございますが、このIFNECは、一番上の閣僚級の会合は執行委員会会合と我々称しております、今回は開催されておられません。11月に、始まる前はロンドンを想定していたのですけれども、後で御報告しますがパリになりそうですけれども、そういう形で開催する、その準備のためにも現状がどうなっているかというのを確認の会合が開かれまして、一つ下の運営グループ会合というのが我々でいうSOMといいますか、我々で言うところのシニアオフィシャルミーティング、局長や審議官級の方々が集まって運営を議論するというものでございます。

その下に三つのワーキンググループ、ここに書いてあります基盤整備作業部会、燃料供給サービス作業部会、アドホック需給国関係会合というのがございまして、私は後ろの二つ、アドホック需給国関係会合とIFNECの運営グループ会合に参加してまいりました。

IFNECの運営グループ会合でございますけれども、今回の会合の参加国は正式メンバーの中では16か国、オブザーバー2か国、国際機関は3機関ということで、一番最後の資料3に実際のリストを書き出しておりますが、登録者名簿では51名出ていることになっているのですけれども、事務局の報告によれば、実際に参加していたのは45名ぐらいであったということでございます。

主要国の代表者としましては、今回、議長国がアルゼンチンになりまして、後程これも御報告しますが、前回の執行委員会会合のときに司会進行を務めておりましたガダノエネルギー鉱業省次官（原子力担当）の方が新しい議長になりまして、議事を進められました。

それからアドホック需給国関係会合は2人の議長ということになっておりまして、1人が同じくアルゼンチンのラファエル・グロッシ駐ウィーン大使、もう一人が私ということがあります。そして日本は、このアドホック会合の共同議長だけでなく、運営グループ会合自身の副議長国でもありますので、私はそちらの方も務めさせていただきました。なお、日本からは私のほかに経済産業省の丸田補佐、原子力政策課の国際協力室の補佐に御同行い

ただきました。

あと副議長国はフランス、中国がごございますけれども、お二人とも、本当の登録されている方ではなくて代理ということで、ここに書いてあります原子力・代替エネルギー庁の国際局副局長のパスカル・シェさん、それから国家エネルギー総局原子力局長のズエシユン・ツァオさんという方がお出になったということでございます。

それから作業部会も大体45名程度の出席ということでございました。

続きまして、中身について簡単に御報告させていただきます。

2ページ目をご覧ください。

運営グループ会合でございますが、先程もちょっと申し上げましたけれども、まず、議長交代がございました。IFNEC創設以来、運営グループ会合の議長を務めてANSN等にこの動きを、活動を牽引してきましたエド・マクギニス エネルギー省の次官補代理ですけれども、米国が新政権発足ということで、次官補代理ではなくて次官補代行というのですか、アクティング・アシスタント・セクレタリーというものになったということでありまして、非常に忙しくなったのでIFNECの活動を継続できなくなったということで、新議長として、フリアン・ガダノさんに議長をお願いしたいということで、冒頭、この議論をしまして、ガダノさんに議長になっていただいたということでございます。

その後、新しい議長から、いろいろアルゼンチンの紹介もあつたのですけれども、IFNECの事務局が各国に対してのサーベイなどでいろいろな課題とかも整理されており、その中から彼自身の問題意識として大きく二つの課題を提案しております。

一つが作業部会の中では密に議論しているのだろうけれども、作業部会同士の間の議論、あるいは作業部会と議長執行部間のコミュニケーションというのがどうも欠けている風があるので、そこはまずしっかり議論をしたいということ。それから二つ目に出席者が何となく少ない感じになっているので、積極的なアウトリーチによって参加者を増やすということは結構大事なことはないかということをご提案しております。

これに先立ち、当日の朝、執行部の非公式打合せをしたのですけれども、そのときにこの新議長は具体的に月1回ぐらい電話会議やビデオ会議というのを執行部と有力国で、恐らくここに書いてあるメンバー間、主要メンバー国にアメリカを加えたような形で電話・ビデオ会議をやろうではないかということをご提案して、認められました。ここには書いておりませんが、今までエド・マクギニスは実際にそれぞれのグループに、アメリカの共同議長もいたり、自ら実際の共同議長みたいなこともやっていたので、作業の内容もよく分か

っていたので、こういったことをオフィシャルにする必要は多分なかったのですけれども、アルゼンチンにとってみると、必ずしもそこまで全ての活動を知悉しているわけではないので、明示的にこういう枠組みをつくってコミュニケーションをよくしたいというような問題意識があるようでございます。

それから三つの作業部会の報告がございました。6月26、27、28とそれぞれ、基盤整備、燃料供給サービス、アドホック需給国とやったわけですがけれども、基盤整備作業部会は基本的に原子力発電のインフラ関連の幅広い話題を議論しているのですけれども、今回は原子力安全に係る産業界の見方など、ここ半年で幾つかやられたワークショップの紹介、それから中小型炉に係る——スモール・モジュラー・リアクター等ですがけれども、に係るパネルディスカッションを実施したという報告がありました。彼ら自身は非常に質のよい議論ができたというふうに言うておりましたけれども、参加者の質が、運営グループ会合のレベルの参加者が少ないので、もうちょっと活動を周知して、いろいろ出してもらい、参加者を増やしたいというような問題意識を提示しております。

それから燃料供給サービス作業部会につきましては、最近は最終処分に関するデュアル・トラック・アプローチを中核的な利用の対象としているのですけれども、今回はこの放射性廃棄物の多国間管理ということをもしやるとしたらどのような問題があるかということについて、社会的受容性ですとか、国際間輸送、資金調達をめぐって意見交換を行いました、ということがありました。

その中身は余り強く触れずに議論の本格化を図るために、単純にいろいろな人が出てきて好きなようにしゃべるということだけではなくて、各メンバー国にこの作業部会の担当者を決めてもらって登録していただくことによって、この会合間の間でもいろいろ議論が進められるようにしたいということで、現在、24か国が登録しているという報告がありました。ちなみに日本は、必ずしもこのデュアル・トラック・アプローチという方向に行っておらず、むしろ自国処理ということで当然進めていることもありまして、現時点ではまだ登録していないという状況です。

それからアドホック需給国関係会合ですがけれども、これは新しい会合でございます、昨秋の執行委員会で発足が認められてはいるのですけれども、TORをつくったり、それから考えるべき4つの領域として、安全性、プロジェクト事業群と、ファイナンス、パブリックアクセプタンスという4領域を設定して、その領域でどんなことを検討すべきかというのが主要課題（キークエスチョン）を書き出すみたいな形で検討を進めてきたところで

ございまして、その内容を確認するということが一つ大きなテーマでした。もう一つは実際に10月、11月までの1年間である程度の成果を上げるべく、一つトピックを選んで、試みに専門家を何人かお招きしてパネルをやろうということで、このプロジェクトデベロップメントの中にあるテーマとして、ローカルあるいはグローバルなサプライチェーンというものを当面の検討テーマとしてはどうかということポーランドから提案がありまして、これに合わせたミニパネルといったものをやらせていただいたということでございます。

ここで議論、後程もう少し紹介しますが、なかなか積極的に活発な議論が出てきたということと、需給国関係という中心視点を置くことによって、基本的な安全とかファイナンスとか一般的なもの、既に手あかがついたような課題であるようなものでも、新しい切り口、検討の方向が何となく示されるのだなということに参加者が感じたというような報告がありました。

それでこのテーマは、非常にそういう意味では議論を呼びそうであるので、11月にも執行委員会の開催の前に、サプライチェーンに係る需給国協力というのを主題とする、パネルなのかワークショップなのか、会議を検討して開催しようということが決まっています、これについてメンバー国から、このアドホック会合自体の担当者、あるいはこの大きな11月の会合の組織委員会をつくるということにして、そこの担当者を募りたいというようなことの報告を受けるということでございます。

それから、ページが進みまして3ページ目ですけれども、事務局からIFNECのここ1年の活動報告ということがございました。これはウェブサイトをこんなふうにやっていますとか、書類をウェブに保存していますとか、作業部会はこれこれをいつやりましたとか、先程申し上げたように3か国でのサーベイというのが2015年に実施されたのですけれども、それはただの数値データだけではなくて、内容を取りまとめたということで文章もつくりますというような紹介がありました。

先程ガダノの方から、先走る形で新議長からの提案ということもあったので、このサーベイ自体については余り本格的な議論はしなかったというのが正直なところでございます。ただ、内容としては、今のコミュニケーションとか参加者の問題というものもちろん含まれていましたので、そういう意味ではサーベイについてはある程度、運営委員会でも議論するというところでございます。

それから、予算の執行状況についての報告がございました。ここに数字は明示的に書いて

ございませんけれども、現状、アメリカ、日本、フランス、ポーランド、スロベニアから資金拠出を得ているということで、引き続き各国、ぜひよろしくお願ひしたいというようなお話がありました。日本からは、例年どおりの資金拠出を目指しているということと、それから、可能であれば2018年の執行委員会——これは主要国の中でほぼ唯一開催できていない国でありますので、それを開催するには予算要求しないといけないだろうということで、まだ概算要求に結実しているわけではないのですけれども、検討しているという旨を紹介しておきました。

それから、今後のIFNEC会合の予定なのですが、※印がまずありますが、政権交代による事情変更があったため、イギリスは執行委員会の会合をやりたいと言っていたのですけれども結局できなくなったという報告がありまして、そこでフランスが非常に鷹揚にも引き受けるということになりましたので、一連の会合は11月にパリでやろうということになりました。ワーキンググループ、あるいは運営グループ会合はOECD/NEAの主催、IFNECの執行委員会会合はフランスとの共同開催という形に多分なるのではないかと思います。日程的には11月6日から9日まででありまして、基盤整備と燃料供給サービスを半日ずつ、それから需給国会合の先程のサプライチェーンに関するコンファレンスをできれば1日半、運営グループ会合を執行委員会の開催の前の確認ということで半日、11月9日に執行委員会をやるというようなスケジュールを一応確認して、今後、準備を進めていくということになりました。

この運営グループ会合に先立ちまして、6月28日、アドホック需給国関係会合を開催させていただきました。これはアルゼンチンのグロッシ大使と私が共同議長ということでございまして、先程申し上げましたように大きくTORや主要領域におけるキークエストョンの確認という話とサプライチェーンに関するパネルということだったので、時間の関係上、午前中にパネルディスカッション、午後にそういう作業関係の議論をしたということでございます。パネルでは5人の専門家ということで、WNAという原子力関係国際機関、それからイギリス、ポーランド、それぞれ供給国、需要国といった感じで、それから需要企業、供給企業みたいな感じでエクセロン、NuScale Powerといったところの専門家からのプレゼンを伺いました。またパネルには明示的に入っていないのですけれども、ディスカッションの中で、ロシアから国営公社のROSATOMの状況についての紹介を受けたという感じでございます。

WNAから実はこの原子力関係の調達の体制、あり方について、ISO9000の上に乗

るような国際基準というのが今あるのだというような紹介がありました。それからイギリスからは、今現状、イギリスには原子力の技術があるわけではないのだけれども、非常に重要なものだと思っているので、いろいろ公募をしたりして、よい技術を選んだ上で組み合わせ需要国に売り込んでいくというようなことを考えているのだというふうに紹介されました。

それから、需要国の方ではポーランドとしては新型炉をぜひ建設したいというようなことを考えているのだけれども、そのときに、ぜひサプライチェーンの中に自国企業を組み合わせたいという思いがあって、自国の企業でいろいろそういったところに供給可能と思われる優良企業を洗い出して、今、カタログをつくっているというような紹介がありました。

それから、他国からのいろいろな調達を認める、多国間調達みたいなことが問題になるのですけれども、そういったことについて、エクセロンとかROSATOMといったところはいろいろな基準を自分たちなりに設定しているというような紹介がありました。

それからNuScale Powerについては、さっきも少し出ていました中小型炉を開発している会社と、ベンチャー企業なわけですけれども、そういったところだと、普通の軽水炉とはまた違った技術、あるいは部品ということになりますので、サプライチェーン自体がまた変わってくるかもしれないといったような話がありましたので、いろいろ興味深い視点が提起されるパネルとなったというのが、私だけではなくて、ほかの方々、参加者からも指摘されておりました。

また、特にポーランドのように、どちらかという途上国に近い側（がわ）の新しい需要国としてこういう問題意識を提示しているというのは非常に大事なことなので、ぜひこういった議論を深めていった方がいいのではないかなというような指摘もありました。

それからここに書いてありますが、規制対応に伴うポストとか、そういった問題の指摘もありました。

いろいろな議論があるということなので、11月の会合で本件を中心テーマとする会議を改めて企画するというのでいいのではないかなということになりまして、ここは先程御紹介しましたとおり運営グループ会合に提示・報告することとなりました。

それから午後に議論されましたTOR、あるいは四つの作業領域に係るキークエスションの議論については余り大きな問題はなかったのですけれども、特に基盤整備作業部会などは非常に幅広い議論を取り扱っているなので、こういったところとの重複排除が必要という

ような指摘が、当の基盤整備作業部会の議長からあったのですけれども、先程御紹介しましたとおり、需給関係という視点を置くことで、今のようないろいろな議論が出てきて、必ずしも一つの安全とか、プロジェクトデベロップメント、ファイナンス、そういう論点で言い尽くしたねと思っているようなものでも、新しい見方ができるのでないかというような議論がありました。

それから、複数の作業グループの話だったと思うのですけれども、実際にこのローカルサプライチェーンというのはプロジェクトデベロップメント関係のテーマであるわけですが、そういったことを進めることによって、そこの地元の人たちの受入れに関する意識が前向きに変わってくと。したがって、パブリックアクセプタンスに対しても影響があるといったような、論点を組み合わせるといような議論があり得るなという反応がありました。こういったことを深めるべく組織委員会というのを恐らく11月会合に向けてつくらないといけないということになりましたので、今後の作業として、キークエスションについての再確認の話、それからメンバーの皆に会合全体の担当者登録を依頼するということ、組織委員会をつくるという前提で、そちらの方の担当者登録をお願いするというようなことが確認されまして、これを運営グループ会合で報告したということでございます。なお、このグループは、11月の執行委員会でちょうど1年経ちますので、現在、1年経ったところで今後の活動を継続するかどうかの判断を得るといような状況になっているところでございます。

最後、4ページ目にその他のところがございます。

①ですけれども、アメリカの、特にエド・マクギニスが抜けまして、執行部にアメリカがない形になりましたので、何となく皆さん不安を感じていたのですけれども、各国から状況報告、自己紹介というのをやったときに、米国からは、議長交代があろうともIFN ECへの支援は引き続き続けていくということと、新政権は本件に前向きであるということを紹介しておりました。実際に今までマクギニスということで、DOEの次官補代理クラスが来ていたわけですが、マクギニスからは新しい政権になってから入った人としてチーフ・オブ・スタッフですけれども、DOEのオフィス・オブ・インフラ・エナジーチーフ・オブ・スタッフのスザンヌ・ジャロースキーという方が挨拶を力強くしておられたと。

②ですけれども、我が国の自己紹介と状況報告というところでは、我が国の原発の再稼働状況、あるいは避難区域が見直されてきていることといったような、福島以降の動きを簡

単に紹介したということと、現在、基本的考え方といったものについても検討しているといったことをごく簡単に紹介しておきました。

それから、燃料供給作業部会における、いろいろな説明のときに、先程の共同議長の報告の中で、いろいろな議論をしていきたいと。様々な国の進捗や考えを聞きながら進めていきたいという説明がありましたので、我が国からは、先程申し上げたように我が国の方針は自国処理中心なので、必ずしもデュアル・トラック・アプローチを是とするものではないのだけれども、科学的特性マップとか、いろいろ作成しているような動きがあるので、ある程度進捗したら時期を見て紹介するというのも可能かもしれないということを一応発言しておいて、これについては歓迎されたので、フォローアップも必要かなというふうに思っているところでございます。

以下、資料1は略称ということで、資料2にそれぞれのグループのアジェンダ、3が先程申し上げましたけれども、参加国についての資料添付をしております。

御説明は以上です。

(岡委員長) ありがとうございます。それでは質疑を行います。阿部委員からお願いします。

(阿部委員) どうも御苦労さまでした。審議官、出張からお帰りになって、全体として、今回の出張のいろいろな会合に出て、これが今回おもしろかったと、これが非常に印象に残ったということは、一つ挙げるとすると何でしょうか。

(進藤審議官) 実は私、このIFNECは最近に関して言いますと、特にアドホック需給国グループ会合について言うと、新しい需要国が生まれてくると共に、供給国側（がわ）でいうと、ロシアとか中国のようにかなり官の力みたいなものを入れて売り込んでいくような新しい動きがある中で、どういう新しい秩序がつかれるかといったところに問題意識があったのですけれども、実際には、この場というのは非常にコンセンサス・ボランタリーベースな話なので、余りがちがちした議論というよりは、各国のいろいろな状況を知るのは非常に大事ななど。特に今回、ローカルサプライチェーンの話というのは、我々も初めはローカルコンテンツ要求みたいなことになるのかなといった懸念を正直持っていたのですけれども、実際にいろいろ話を聞いてみると、余りそういうところは、もちろんローカルサプライを使ってほしいという気持ちがあるにしても、いろいろな切り口での努力がされていると、こういうのを実際に、みんなが納得するようなテーマでいろいろ掘り下げていくということ自体に結構意味があるのだなと思ったというのが、今回出ていて、一番ポジティブに、かつ割と印象的に感じたことでございます。

なので、11月にもう一回このテーマでやろうということについても、割と素直に、やろうではないかという感じで受け入れることができました。

(阿部委員) 順番にちょっと細かいことを伺いますけれども、2ページ目の1の②で、積極的なアウトリーチによって参加者を増やすことを当面の課題として提案したとありますけれども、この会議は、政府間の会議ですか。

(進藤審議官) 代表は政府の関係者なのですけれども、ステークホルダーの参加も結構推奨されているので、民間の方とかも入っていたりします。今回は、ワーキンググループによってはエキスパートとして、外の人たちを呼んだりしているという状況であります。しかし、リストのほとんどは、一応は役所の人になっている感じです。

(阿部委員) そうすると、いろいろなワークショップとか会合は公開で開いて、民間の人も参加できると。これは参加費か何か取ってやるのですか。よくありますよね、そういう会議が。

(進藤審議官) 本件に関してはまず、参加費は取っていない。ただ事前登録制にしているので、OECDでもありますし、勝手に突然来て、入るということはできないので、登録のところで恐らく各国、確認している、この人は真っ当な人だなという形でやっているのではないかと思います。

これが一つの作業グループレベルになりますけれども、去年、作業グループではないですね、執行国会合と同じレベルで一つの大きなワークショップを、ステークホルダー・パーティシペーションみたいな、インボルブメントというテーマでやったときは特にお金は取っていなかったと思います。そのときは本当に外の方々も多数おいでになったのですけれども、無料だったと。

(阿部委員) 次、③で中小型炉、最近注目を集めていますけれども。

これは疑問なのですけれども、日本語で中小型炉と言っていますね。英語はスモール・モジュラー・リアクターですね。「中」という意味が入っていませんよね。なぜ、これは日本語で中小型炉というのでしょうか。誰か御存じですか。室谷さん、知っていますか。

(室谷参事官) これは申し訳ありません。私はちょっと。

(阿部委員) 知らない。

次の質問は、これは小型というのは、出力が幾ら以下、中型は出力がこれからこれと、こういう定義はどこかにあるのでしょうか。

(進藤審議官) すみません、私自身、会合の中では、必ずしもそういう定義まで立ち入った議

論をしていなくて、感覚的には割と、やっている人たちが我こそはという感じで言っているかなと。

ただ、概念的には、中小型のものを正にモジュラー、モジュールなので並べていけると、それぞれは割と簡単につくれるというコンセプトのものを、みんなかなり幅広く我こそはという感じで、私が会合に出ていたときも三つぐらい、そういうコンセプトでうちはやっているのだという紹介のところがありました。

(岡委員長) 今の阿部先生の御質問にあったSMRはもとは、今もそうだけれども、スモール・ミディアムサイズ・リアクターです。モジュラーではなくて。

今は、SMRはスモール・モジュラー・リアクターと言っている方々もいると思いますけれども、もともとは中小型炉はスモール・アンド・ミディアムサイズ・リアクターと言って、随分前から、2000年頃からそういうふうに行っていると思います。

(阿部委員) 最近のセールス文句は、従来型の大型で、1個ごとに設計して認証を得てやるという面倒な手続が要らなくて、モジュラー式に、いわば量産タイプですね、一回型式認証をとれば、どんどん生産できるという意味において、生産・普及しやすいのだというのがセールスの文句になっていますから、そういう意味では、出力何キロワットというのではなくて、そういうモジュラー形式になるという意味でのあれなのかもしれないですね。

(進藤審議官) 実際、私は会議のときに全くそういう気分で聞いていたというのが正直なところですが、例えば10個ぐらい入るような炉だと、当初仮定したとしても、いきなりそんなに資金が得られなかったりしたときに、例えば二つだけで始めますとか、そういった意味で受入れ国側にも柔軟性があるねというような議論がされていました。

ただ、皆様も御案内だと思うのですが、そのモジュールをつくるための製造設備のところはものすごくお金もかかりますし、どれだけつくれば元がとれるのだといったあたりもよく詰めなければいけないので、輸出的にも経済的にもまだ課題があるということ、関係者はみんな知っています。

(阿部委員) 次の④ですけれども、2行目に自国処理の基本路線を推進しつつありますね。これは、私もいろいろ伺うのですが、OECDにおいて使用済燃料の処理は出した国が責任を負うという原則があると。それはいわゆる微妙な違いですけれども、その国が責任を負うということであって、自分の国の中でやらなければいかんということではないのだと、突き詰めればですね、というふうに伺いましたが。

ただし、同時に、現実的には日本、フランス、アメリカのように大量に使って大量に使用

済燃料を出している国は、それは自分の国でまずやるべきではないのかというのが一つの通念としてあるというふうに伺っていますけれども、ここではその原則について議論して、それで行こうではないかということになったのでしょうか。

(進藤審議官) すみません、これはデュアル・トラック・アプローチを御説明するために3行を書き込んでいますけれども、このグループの中では、一応、デュアル・トラック・アプローチということを見いだして、そのデュアルの一つ目が多国間処理ではなくて自国処理というものをちゃんとアプリシエートするよという形で、例えば日仏などの自国処理中心でやっていて余り多国間というようなことを喧伝してもらっても、それだけみたいな感じになったら困るといった国との間で、ある程度概念的な融和を図ったということなので、そういう意味ではかなり工夫した、整理して、そしてデュアル・トラック・アプローチなのだよということなのですけれども、実際に作業部会自体、一応ここまでは整理ができたという前提で、その上で多国間の処理とか管理を考えるときのいろいろな課題をプラクティカルに少し考えていこうというフェーズに移ってきています。その中の幾つかのトピックについて今回議論したというふうに聞いております。私は出ていないので、それ以上はちょっと詳しくは分からない。

(阿部委員) ⑤ですけれども、これは需給国関係会合で、サプライチェーンという話がいろいろ議論されたということですが、サプライチェーンというと、正に原料から加工の段階ということですが、これは原子炉を頭に描いて議論しておられるのか、それとも燃料を頭に描いて議論しておられるのでしょうか。

(進藤審議官) 概念的にはいろいろなものを取り上げられると思いますが、今回の議論は割と原子炉とかなのですけれども、そのうちの部品とかを含めて、もちろんローカルサプライという議論があるので、その中の一部という議論は入り込んでいるという感じだったと。

(阿部委員) 燃料になると、例の供給安全保障という話があって、供給プールをつくったらどうかとか、いろいろありますね。そうすると、今回は炉の調達、供給ということで、ある程度部品、その他も多国間でいろいろ寄せ集めてというプロセスはあるのでしょうか。

(進藤審議官) パネルの方々のコメントでは、炉から始めたとしても、結局いろいろなものを入れるということになると、正に多国間調達ということになるねと言っていて、その調達の対象は多分いろいろあるということを念頭に置いておられると思います。そのときは、本当にどう認証していったり導入していくのかとか、いろいろな問題があるのですけれども。

(阿部委員) そうですね。それはまた後で、基準設定ということも出てまいりますけれども。

次に⑥ですけれども、予算についてお話をして、資金拠出の話もしたということですが、これも、これは国際機関みたいに分担金で義務づけてやっているのか、それとも全部任意拠出で、希望する国は出すということで、しかも予算というのは何か大きなものに使うのでしょうか。別にプロジェクトはやっていないのですね。せいぜい会議費ですね。

(進藤審議官) これは、初めのうちはアメリカがかなり一生懸命やっていたこともあって、アメリカがほぼ全額拠出していたと私は聞いておるのですけれども、ある段階でちょっとそれが苦しくなったので、OECDのNEAなどに事務局自身をお願いして、そのかわり必要な経費を適宜出そうと。経費からアメリカは今もそうですが、一番多目に出していますけれども、内容としてはボランティアなものを積み上げて、その積み上がった範囲内で活動しよう。基本的には会議開催費というような感じになっています。

全体で例えば、正確ではありませんが、大体500キロユーロぐらいのバジェット、毎年ぐらいの感じで回っていて、それをみんな出しているという感じです。

(阿部委員) 次に(2)の方に行きまして、アドホック需給国関係会合、②で先程触れたサプライチェーンの中において、そこから調達するときの基準の設定とありますね。これは正に、一番中心になるのは、原発に関して安全基準をどうするのかと。これは現状は各国、全部自分の違う、異なる安全基準でやっているわけですね。したがって、耐震基準をどこまで求めるかとか全部違ってくるわけで、これは、それを標準化しようという議論があるのですか。それとも、お互いどういうふうに行っているのか透明性を高めようとか、どんな議論だったのでしょうか。

(進藤審議官) 今回は情報共有だったので、別にどこへ持っていこうということではなくて、私たちがやっている取組を御紹介しますということでしたと。基準の云々(うんぬん)の方は、どちらかという品質保証管理体制みたいなものについてISO9000タイプの体制を敷けとか、マニュアルを置けとか、そういうふうな話の上に、少しこの原子炉の調達関係の議論があると。もちろん技術基準的な話もあり得るのですけれども、とりあえず体制的な議論を少し標準化できないかという話があるという紹介がありました。

それと、需要国とか需要企業は、具体的にどれ以上でなければいけないということよりも、例えば中小企業とかローカル企業を考えたときにサプライの継続性があるかとか、もし問題があったときにちゃんと引き受けて、ただでもちゃんとリカバリーを打てるのかとか、何年間はちゃんと保障できるのかとか、設計能力があるのかとか、割と一般的ではあるのですけれども、そういう幾つかのチェックポイントを持って、それを満たすような人は一

応購入の対象となるという前提を置いて活動しているのだという類の議論をしまして、実際にはそれはすごく似ているのですけれども、完璧に一緒ではないわけですから、委員御指摘のように、いずれは標準的なガイドラインとかもという話になるかもなどは思いますけれども、そこからはそこまで深まった議論はしていません。

(阿部委員) そういうふうに国際的に供給となると、現在、原子炉をどこが供給するかという競争していますけれども、OECD的に考えると、競争条件をちゃんと整えるべきではないかと。あるいは、そういったことで、原則、公開競争入札にすべきではないかという議論があり得ますけれども、そういう議論はなさっていますでしょうか。

(進藤審議官) それはさっきの印象的だったということなのですが、ここの場はやはり、全く無理とは言わないのですけれども、みんなやりたいことを自発的にコンセンサススペースと言っているので、余り望んでいない国があると、多分そこまで踏み込めないわけです。

ただ、仮に別のところで同じ議論をするときでも、我々としても各国が実際どんな考え方で、どんなことをやっているのかということを知るのは非常に意味がある。実際に我々が想像も余りしていないような活動がいろいろな形でやっていて、今の場合でいうとローカルサプライチェーンでも、入れてほしいと思う立場の国や企業と、調達する側の企業の発想というのはやはり目線が違っていて、入れてほしいと自分の国と買う企業だけですけれども、調達する側は必ずしもこの国に限らず、いろいろなところからといったときに、どんなルールを自分で持つておくべきかというふうになっていくわけですから、そういう意味では非常に伏線的な内容はできるかなと。ただし、今回もそうですし、将来的にも余りそういう厳しいラインを作らしましょうみたいな議論になるかどうか、正直分からないという感じです。

(阿部委員) これは私の意見になってしまいますけれども、日本は例えば、どこかの途上国に新しく原子炉を始めようと、原発を始めようといったときにどこから買おうかというのであれば、できれば公開入札にして、日本も平等に参加したいと。日本の国政、特性からして、例えばその国の通達官庁が実は賄賂が欲しいのだというときに、日本は国内法でそれをやるとすぐつかまっちゃいますから、したがって、そういう意味では競争で不利になるのですね。

それから、ある国は、では分かったと、特に駆逐艦と戦闘機を一緒に売ろうというような組合せで売れる国はいい。これも日本はなかなかできませんね。それから、分かったと、うちは政府企業なので極めて低利子でやろうというときも、これはなかなか日本の民間企

業がなかなか競争できない。そういう意味で言ったら、私は、日本は公開で平等な競争条件でやるべきだということを主張すべきではないかと思うのですけれども、お聞きすると、なかなか今はそこまではいかない。できるだけそういう意見交換を、その点も何となくそうだよという雰囲気をつくっていかうということでしょうか。

(進藤審議官) 雰囲気づくりということも多分、もしあれば、それは一つの進展だと思うのですけれども、今の実情確認、つまり例えば中国とかロシアとかが本当にどんなふうな形で売込みポイントをつくっているのかみたいなところもすごく意味があるのかなと、知ることがですね。というふうに、今のところ、ちょっと問題意識を広げて理解しようという感じかと。

(阿部委員) 最後になりますけれども、4ページで4ポツ、その他で、日本の再稼働、避難区域見直し、基本的考え方の検討状況など簡単に紹介したとありますが、何かリアクション、反応はありましたか。

ないですか。ありがとうございました。

(岡委員長) どうぞ。

(中西委員) どうも御説明ありがとうございました。

この書かれたもののまとめを見ますと、最初にアメリカが議長国でなくなったと。それからあと、作業部会もあまり参加者をふやしたいとか、1年の活動報告も割とすらすらと終わったというふうに伺いますと、今回、少し縮小しているような気がするのですが、加盟国の数は、IFNECが11年前にできたと理解しているのですが、アメリカ主導で。どういふような変化といいますか、かなり増えているのでしょうか、減っているのでしょうか。

(進藤審議官) 加盟しているということについて言うと、増えています。アルゼンチン自体がたしか余り入っていなかったのが今回入るみたいな議論をしまして、もう1か国ぐらい検討している云々(うんぬん)という話がありました。

現在、私がそのときにもらったパンフレットでは、参加国というのは34あって、オブザーバー国が31あることになっているのですけれども、実際に出てくるのはちょっと少ないなという、そういう感じで、さっきの五十何人来るはずとか六十何人来るはずが45人という、そういう意味で、キーマンがちゃんと出てきて、しっかりやるようにしようよというのを、多分、新議長としては言いたかったのだろうなと。

(中西委員) そうしますと、やりようによっては非常に参加者もふえてくるということによろしいですね。主要な国はほとんど入っているのですよね。と考えてよろしいですね、

インドとか。

(進藤審議官) インドは入っていないです。

(中西委員) パキスタンとか。

(進藤審議官) パキスタンもまだ入っていない。

(進藤審議官) 今回、特にアドホックグループの発言で思ったのは、ポーランドのように新しく買おうという国が、意外とあまりいなくて、売込み能力がある、原子炉をつくれる国とかは割と出てきていっぱい話しているわけなのですけれども、そういう意味でサプライチェーンというトピックで、ポーランドとか、わざわざこういうことを知りたいと言ってきているということで、新しく需要国側の参加意識をかきたてられるとすごくいいんじゃないかという印象をみんな持ったということです。

(中西委員) 分かりました。どうもありがとうございました。

(岡委員長) このアドホック需給国会合、興味があるのですけれども、この発表資料は、皆さん、パワーポイントであるのでしょうか。それとも口頭でおっしゃったのでしょうか。

(進藤審議官) 当日初めて出てきたのですけれども、資料がパワーポイントで。恐らく後日、このウェブサイトみたいなところに載って、加盟国は見られると思います。

(岡委員長) 二つ目の質問は、供給というと、これはどこかの国がどこかの国に、よその国につくるという話だと、いろいろ経験があるのはROSA TOM、中国がパキスタンがつくっている。それからフランスがフィンランドにつくっています。また韓国はUAEでつくっている。そういう、サプライチェーンという意味で言えば、米国も東芝も関係している案件なんかも。そういう情報、これは全部情報が出るとは思わないのですけれども、そういうものの情報は、日本では少ないのではないかと。

(進藤参事官) ああ、世の中に。そういう問題意識に対して、ここは意外と使えるのではないだろうか。

(岡委員長) そうですね。細かいところまではプライベート企業の話なのですけれども、国としてもある程度そういう情報を持っていないといけないなと思って、むしろ、今申し上げたような企業の発表はあまりないので、そういうふうな情報を集めるのはよいかもしいですね。

例えばフィンランドなんていうのは、話を聞くと、やはりローカルの土木の問題があった、コンポーネントのサプライだけではなくて、実際に労務や建築工事もありますので、フィンランドの国のローカルルールといいますか、国のルールがいろいろあるとか、そういう

問題もいろいろあったようなところも聞いているのですが、そういうものを含めて、単にものをつくって売るというイメージではなくて、経験を日本としては集める必要があるのではないかなと思います。

阿部先生がおっしゃった賄賂みたいな話は、ちょっとまた別の経験で、別のところで集めていただくしかないかもしれませんが、普通の話でいろいろ、個々に集まっていないものでいろいろあるのではないかなと。そういう意味では韓国に発表してくださいよとか、フランスに発表してくださいよとか、中国に発表してくださいよと、そういうのはあるのではないかなという感じはしましたけれども。

(進藤参事官) 委員長御指摘のとおり、これから組織委員会をつくって、どういうのを考えようかといったところで、まさにそういう戦略的なことを考えて発表をお願いしたりとかできたらいいというふうに思っています。

ROSA TOMが実は今回、参加者の個人的資質かもしれませんが、非常にアウトスプークンで、中国の間でこういう炉を入れたときに、初めは土木とか何%で、重要な炉の中心部分は100%こっちで、それが何年かたつと少しまたぐっと変わってきてとか、いろいろなことをおっしゃったりもしていたので、すごくそういう意味ではインフォーマティブな感じがあるというか、できるかなというふうに思いました。

また、炉自体の供給はROSA TOMもしているけれども、ローカルサプライを入れるという意味では需要国でもあって、受入れ国も同じように炉は需要国なのだけれども、いろいろな部品は供給したいという意味で、すごく需給関係が行ったり来たりするので、そういう意味では非常に気をつけながら整理をしていくことによって、深味のある理解が得られるかなというふうに思いました。

(岡委員長) ありがとうございます。ちょっと、審議官はこの後、御予定があるということで、もしなければ、これで。ありがとうございました。

(進藤審議官) ありがとうございました。

(岡委員長) では、議題2について、事務局からお願いします。

(室谷参事官) 2件目、その他案件でございます。今後の会議予定について御案内申し上げます。次回、第24回原子力委員会の開催につきましては、後日、原子力委員会ホームページなどの開催案内をもってお知らせ申し上げます。傍聴される方は、その辺、御注意していただけたらありがたく存じます。

以上でございます。

(岡委員長) その他、委員から御発言ございますでしょうか。

それでは、御発言がないようですので、本日の委員会は終わります。

ありがとうございました。